

応募者と家族のための

F. A. Q.

2021年10月
(公社)UWC日本協会

1. 応募に関して

《Q1》なぜ高校2年から2年間なのか？

16歳からの2年間は、UWC創立以来の原則であり、国際バカロレア・ディプロマ課程の要件(注)でもある。寮生活を通じて国際教育を行うことを考えると、柔軟性とともな自立性を備えたこの時期が、最適と思われる。

(注) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm を参照

《Q2》日本協会の選考時に高校2年生である場合、受験できるか？

UWC日本協会では、在籍学年および年齢に関する応募資格を以下のとおりとしている。

【在籍学年要件】

- 4月に新学期が始まる学校に在籍している場合、2021年9月時点で、高等学校もしくはこれに準ずる学校の第1学年に在籍しており、かつ一次選考受験時に同じ学年に在籍していること。
- 9月に新学期が始まる学校に在籍している場合、2021年9月現在、国際バカロレア・ディプロマ課程の始まる前の学年に在籍しており、かつ一次選考受験時に同じ学年に在籍していること。

【年齢要件】

- 2022年8月1日時点で、原則、満16歳以上であること。
よって高校2年生は受験の対象外となる。

《Q3》現在、日本の高校から海外の高校に交換留学中だが、日本協会が実施する選考を受験できるか？

UWC日本協会の募集要項に記載されている応募資格を満たしていれば受験はできるが、日本に一時帰国して、受験することが要件となる。該当学年について確認が必要な場合は、以下の項目を記し、日本協会 (uwc@keidanren.or.jp) までメールにて照会いただきたい。

- 1) 氏名(フリガナ)
- 2) 生年月日
- 3) 在籍国名および学校名
- 4) 在籍校の年度始まり時期(●月) ※在籍国の学制と異なる場合はその旨を記載
- 5) 留学開始の時期ならびに在籍校での学年
- 6) 復学時期ならびに復学先学年(学校の方針を事前にご確認ください)

《Q4》 学校長が受験承諾書の発行を許可しない場合、承諾書がなくても応募可能か？また、UWC日本協会より学校長に発行をお願いしてもらえるか？

受験承諾書の提出は必須（応募資格条件となっている）であり、承諾書なしの応募はUWC日本協会では受け付けられない。在籍校には、受験承諾書以外にも成績証明書や学校長の推薦書を記入していただくことになっており、在籍校が受験を認めない場合は、必要な書類の提出が難しくなるため、その場合は受験をあきらめていただくことになる。承諾書の代わりに退学を求められる場合についても、その判断は各家庭で判断いただくことになるが、受験のために在籍校を退学してまでも受験することはお薦めしない。なお、UWC日本協会から在籍校へ発行のお願いをすることもできない旨ご理解いただきたい。

《Q5》 受験倍率はどれくらいか？

昨年度（2021年度派遣生）は4.3倍、2020年度は4.6倍、2019年度は6.1倍だった。昨年度の応募者数・合格者数等はUWC NEWSで確認いただきたい。

《Q6》 日本協会特別支援奨学生の実績者はどれくらいいるのか？

応募者は年によって変動する。昨年度の選考（2021年度派遣生）では、6名が応募し2名が最終派遣、2020年度では9名が応募し3名が最終派遣、2019年度は11名が応募し3名が最終派遣された。

《Q7》 両親の転勤で幼少期より海外に在住しており、現地校（インターナショナル・スクール等）に通っているが、日本協会の実施する選考を受験できるか？

UWC日本協会の募集要項に記載されている応募資格を満たしていれば受験は可能だが、日本に一時帰国して受験することが要件となる。日本協会の一次選考での数学や国語の出題については、日本で初等中等教育を受けていることを想定しているため、長く海外で生活している場合は、国際本部が行うGlobalSelectionProgramme 受験の検討を勧める。

《Q8》 国内のインターナショナル・スクールに通っている。英語のみで筆記試験を受けることはできるか？

日本協会の選考は、数学や国語、日本語面接など、主として日本で初等中等教育を受けていることを想定しており、また、一次・二次選考ともに英語のみで受けることはできない。該当者は、GlobalSelectionProgramme 受験の検討を勧める。

《Q9》 国内の高校に通っているが、日本協会選考でなく、GlobalSelectionProgrammeを受験することはできるか？

受験者は、日本協会が実施する選考、または、国際本部が実施する選考（GlobalSelectionProgramme）のどちらかを選択することができる。ただし、

GlobalSelectionProgramme 合格者に奨学金が付与されることはなく、全額自己負担となるなど条件に違いがある。詳細は、国際本部のホームページ (<https://www.uwc.org/gsp>) で確認してほしい。

なお、GlobalSelectionProgramme に関する質問は、日本協会では受けかねるため、直接国際本部に問い合わせいただきたい。

《Q10》 GlobalSelectionProgramme で不合格だった場合、日本協会の選考を受験することはできるか？

受験者は、入学を希望する年度において、GlobalSelectionProgram もしくは日本協会選考のどちらか一方を選択する必要がある。同年度に両方を受けることはできない。

《Q11》 カレッジ奨学金は「ニードベースでの支給」とあるが、どのように決定されるものなのか？

派遣が決まった生徒に対して、カレッジ側が各家庭の経済的負担能力を踏まえて審査し、具体的な支給額を決定し支給するのがニードベース方式である。

選考プロセス過程で提出いただく「家計調査書」の記載内容についてカレッジ側が審査のうえ、該当年度の全奨学金申請生徒の家計状況を鑑み決定するため、一概にいくらの所得額に応じてどの程度の奨学金が支給されるのか、日本協会では回答することはできかねる。基本的な考え方としては、現在ご家庭が拠出している該当生徒にかかる教育費同等分は最低額としてお支払いいただくことになる。過去の事例では、カレッジ側提示額の奨学金のうち、0%～100%が支給されている。なお、全額カレッジ奨学金枠については28%～92%の支給となっている。

2. 選考に関して

《Q12》 一次選考の形式と出題範囲はどのようなものか？

2022年度派遣する奨学生の一次選考は、国語、数学の2科目について筆記試験を行う。国語は、選択および記述式で、公立高校1年程度の学習範囲（古文・漢文を除く）から文章読解と国語知識（漢字の書き取りや読み）を問う。数学は記述式で、数I分野（「データの分析」を除く）および中学校課程の分野が出題範囲となる。

なお今年度、英語の選考試験は行わない代わりに、応募資格の条件として、英語検定試験の成績証明書の提出を求めることとした。これは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から試験時間の短縮を考えての措置ではあるが、2023年度以降もこの方針を続ける予定である。応募時に提出する英語検定試験の成績証明書の種類、必要な点数等については年度によっても変わる可能性があるため、HPを確認してほしい。

《Q13》 一次選考の過去問題は掲載されているのか？

数学のみ試験をイメージしていただく参考として「一次選考における過去の使用問題について（参考）」をHPに掲載している。

《Q14》 二次選考の英語面接では、英語力はどの程度必要か？

目安としては英検2級程度だが、カレッジでの生活は、授業も寮生活も原則全て英語で行われるので、流暢とまではいなくても英会話はある程度できることが望ましい。

《Q15》 二次選考のグループ・ディスカッションとはどのようなものか？

グループ・ディスカッションでは、一次選考合格者が6～8人程度のグループに分かれて、提示された議題について日本語で討議する。

《Q16》 選考で重要視されるのはどのような点か？

一次選考では学力、二次選考では面接等を通じUWCのカレッジ生活に必要な素養があるかを判断する。具体的には、異なる環境や困難な状況下でも頑張り抜く強い精神力、社会に対して広く興味を持ち、学びに対して常に意欲的で、コミュニケーション能力やリーダーシップを備えているか等を重視している。

《Q17》 選考にむけてどのようなことを準備したらよいか？

日頃から新聞やニュースなどを通じて国内外の時事問題に関心を持ち、自分なりの問題意識を養うことや、ボランティア活動、クラブ活動などを通じて自分の実体験を増やすことなどに心がけると良い。

3. 派遣の決定、手続きに関して

《Q18》 派遣が決定するのはいつごろか？

派遣年の5月または6月頃。日本協会は二次選考に合格した生徒を派遣生として推薦するが、推薦に伴う書類を提出後、各カレッジが最終合格の判断をするため、派遣決定時期は上記となる。

《Q19》 派遣決定後、日本の高校にはいつ頃まで在籍するのか？

派遣生の大半は高校2年生の1学期までは在籍していることが多いが、その後どうするかは、各々学校と話し合い、決定することになる。状況変化が発生した際に日本の高校に復学しやすいよう、派遣期間中も籍を残す措置をとってもらった派遣生の例もある。

《Q20》 各カレッジに提出する書類やビザの手続きなどは日本協会が行うのか？

日本協会は、一般的な留学斡旋企業ではないため、各カレッジに提出する書類

については全て各家庭が準備することになる。また、決定後の派遣先カレッジとの連絡やビザ取得および個人負担金の送金などについても、各家庭が行う。

4. カレッジでの生活に関して

《Q21》 買い物は？

文房具、菓子などが買える売店が構内にあるカレッジもある。ない場合でも、日用品はインターネット通販や周辺の商店で手に入るため不自由はない。

《Q22》 寮生活は？学校の設備は？

寮は、基本的には男女別の階ないし建物に分かれている。各部屋には、異なる国籍・人種の生徒が、2人～5人割り当てられる。基本、日本人同士が同室になることはない。各校とも寮のほか、食堂、講堂、図書室、特別教室などの設備がある。

《Q23》 衣類は？

日常生活の典型的服装は、ジーパンとTシャツ。途上国からの留学生も多く、高価なものは不向きである。男子はスーツ、女子はやや正式なワンピースが一着あると便利。着物（浴衣）は必需品ではないが、文化紹介などで着用する機会が多い。

《Q24》 食事は？アレルギーへの対応はあるか？

3食とも、決められた時間に食堂にてセルフ・サービス方式で摂る。メイン・ディッシュは2～3種類から選択するカレッジが多い。カレッジによっては授業時間の間に軽食（クッキーとお茶など）が用意される。

アレルギーへの対応についてはフレキシブルなカレッジもあれば、あまり対応が進んでいないカレッジもあるし、アレルギー反応の軽重に個人差があるため、カレッジの個別具体的な判断が求められる。生活に支障が出ると思われる際は、12月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール（各カレッジのHPにあるadmission@～等）で問い合わせることがのぞましい。

《Q25》 宗教は？

自由。個人の信仰は尊重される。様々な宗教の生徒がいるため、多くのカレッジでスピリチュアルセンターやお祈りをするための場所が用意されている。そのほか、宗教についての討論会や、他の宗教を知る機会などもある。

《Q26》 夏休みの過ごし方は？

夏休みの期間が2～3カ月ということもあり、ほとんどの生徒が帰国する。留学先国で旅をする生徒や、友人の出身国を訪問する生徒もいる。各校とも生徒が寮に滞在することは認めていないが、ホームステイ先を探してくれる場合や、滞

在費を支払えば(あるいは指定された労働を行えば)寮に残ることができるカレッジもある。

《Q27》安全面は？

警備員の勤務体制などは、カレッジにより異なる。各校とも比較的安全な地域に所在するが、日本とは治安も異なるため、校内・外の行動において自己管理能力は必要となる。

《Q28》校内・外での所持品の紛失、盗難などにはどう対応すればいいか？

所持品の管理については自己責任が原則となる。基本的には戻ってこない場合が多く、校内でもいろいろな背景を持つ生徒がいることを認識して、日本とは違う環境であるという意識を常に持つことが求められる。

《Q29》アルコールやドラッグの問題に直面したらどうすればよいか？

UWCの所在国ごとに、飲酒・喫煙やドラッグなどに関する規定・法律また罰則規定は異なるが、ドラッグはもちろんのこと、飲酒・喫煙といった行為は、全てのUWCで原則、校則として禁じられている。校則違反が発覚した場合は、保護者やナショナル・コミッティーに報告や改善要求が送られ、場合によっては退学を含む厳しい罰則が科される。周りの動向には関係なく、言動、行動の全てに自己責任や自己管理能力が求められる。

《Q30》病気になった場合のケアは？

看護師および校医の勤務時間や校内在駐状況はカレッジにより異なるが、各校とも緊急時にも対応できる体制を整えている。

《Q31》生活面でのトラブルや精神面で問題に直面した場合、校内にカウンセラーなどはいらるのか？

カウンセラーが常勤または定期的に学校に来るカレッジもある。担当教員や医務室等に相談することもできる。

《Q32》LGBT+Qへの配慮はあるか？

男女混合寮があるカレッジなど、整備されつつある(ただし、使用については手続きやルールを確認する必要がある)が、カレッジにより状況が異なり、日本協会ではすべてのカレッジの詳細を把握していない。

配慮が必要と考えられる際は、個別に日本協会に相談のうえ、12月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール(各カレッジのHPにある admission@~)で対応の詳細について、問い合わせいただきたい。

《Q33》ハンディキャップ、持病に関する対応はあるか？

カレッジの個別具体的な判断を必要とする案件で、カレッジは個々の生徒のハンディキャップ／持病の状態を精査する必要がある。

対応が必要と考えられる際は、日本協会では判断が難しいため、12月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール（各カレッジのHPにある admission@～）で問い合わせいただきたい。

5. カレッジでの勉強・進路に関して

《Q34》授業の程度・内容は？

科目によっても異なるが、一般に、主要教科は大学教養課程、補助教科は高校と同程度以上と言われている。作文・実技・実験・レポートなどに重点が置かれる。暗記よりも理解力が問われ、興味のあるものについて深く追求することが求められる。宿題も多く、「人生で最も多忙な2年間だった」と語る卒業生もいる。

《Q35》〇〇という活動ができるカレッジはどこか？

カレッジの詳細な授業内容や、課外活動の種類などは日本協会では把握していないため、自分がやりたいことができるかどうかは、12月の選考が始まる前に個別に各カレッジに直接メール（各カレッジのHPにある admission@～）で問い合わせいただきたい。

《Q36》履修科目はいつ決定するのか？

留学前に資料の送付を受けて検討したうえで、留学直後に指導教員と相談し、原則的には9月中に決める。授業開始後一定期間は変更が可能なので、「不向きだ」「ついていけない」という場合には、早いうちに担当教員に相談することをすすめる。

国内、海外大学共に、IBの特定科目やレベルの履修を受験の必須要件とする学部がある（医学部をはじめとする理系学部、経済学部など）。

すでに検討している大学や学部がある場合は、指定要件を各大学のHPや教務課などに事前に確認することをすすめる。

《Q37》大学への進学は？

日本、アメリカ、ヨーロッパの大学に進む卒業生が多い。詳細は、HPのUWCリーフレットやUWC NEWSを参照されたい。

進学については、各カレッジの担当教員のほか、卒業生にも相談することをすすめる。

《Q38》日本の大学に進学する場合に受験勉強を別途する必要があるか？

高校卒業資格と同様、IB（国際バカロレア）は日本の大学の入学資格として認められている。また、IBを活用した入試制度を導入している大学・学部は増

加傾向にあり、これらの制度で受験する場合は、UWCでの経験やIBの成績が大学受験に直結するので、別途受験勉強をする必要はほとんどない。

一方で、志望校がIBを活用した入試制度を導入しておらず、一般受験となる場合には、IBと一般入試では試験形式や重視する点、期待されている習熟度が異なるため、別途受験勉強に取り組む必要がある可能性が高く、受験準備のために予備校へ通った卒業生もいる。また、4月入学をする場合は日本の高校在学時の同級生と比べて入学が一年遅れる点にも留意する必要がある。

《Q39》 派遣生のIB取得率は、どのくらいか？各カレッジのIB平均点は何点か？

日本からの派遣生の9割以上はIBを取得している。

国際バカロレアによるとUWC以外の生徒を含む全体合格率は、コロナ前（～2019年）がおおよそ70%台後半、2020年や2021年がおおよそ80%台後半である。各カレッジのIB平均点は、日本人以外の生徒も含めた形でカレッジ独自に公開しているところもある。カレッジや実施年によって異なるが、おおよそ30点台前半から中ごろといったところである。

以 上